

<報 告>

## 日本統治時代の台湾生活誌 ( )

柴 公 也

### (30) 二つの島で

知名茂子 (1917 年生) 沖縄県立第一高女卒

私は、琉球王国最後の国王である尚泰の四男の尚順を父に、尚王家の家扶 (\* 執事) である伊是名朝睦の長女真子を母に、大正 6 年 9 月 13 日、松山御殿 (\* 那覇市首里桃原町の尚家の邸宅) で生まれました。母と結婚する前、父には妻がいたのですが、子供が出来なかったので、その人は身を引いたのだそうです。父は昔の人ですから、真子の他にもう一人妻 (\* 金城ウシ) がおりました。ウシには 7 人の子供がいましたが、真子には 9 人の子供がおりました。私は二人の母の 16 人兄弟の 9 番目の子供で六女でしたが、真子の次女でした。

父は、おぼろげながら 6 歳の時の明治 12 年 3 月 27 日の廃藩置県、いわゆる琉球処分の際の情景を覚えているそうです。何でも旧の節句の頃から首里城内が騒がしくなったとのことですが、首里城の南殿で、当時の沖縄では珍しい洋服を着た琉球処分官の松田道之が朗々たる音声で何かを読み上げていたそうです。並みいる城中の百官たちは、咳一つせず静まり返って聞き入っていたとのこと。

祖父の尚泰は、「時勢には逆らえない」と、反対する家臣たちを押し切って首里城を明け渡し、中城御殿に移ったのだそうです。その後、上京して靖国神社の近くに二千坪の屋敷を与えられ、上の王子二人と御付きの者たちと住んでおりました。明治天皇からは侯爵に叙され、公債証書二十万円を支給されました。祖父を始め、御付きの者たちも妻を首里に置いて来ましたから、東京では皆江戸妻と暮らしていたそうです。祖父は、江戸妻たちとの間に、7 人の子女を儲けたとのこと。

祖父は、麝香の間の伺候を命じられ、参内する時以外は閉門して読書三昧と花卉の栽培に明け暮れていたそうです。教育熱心だった祖父は、父たちに「これからは学問で身を立てよ」と常々言い聞かせていたそうです。また、時折冗談交じりに「英雄は嫌いだ。どうか英雄にはなってくれるな」と諭すこともあったとのこと。上京後は、明治 17 年に一度沖縄に帰っただけで、明治 34 年に 59 歳で波乱の一生を終えています。

父は、子供の頃漢学を学んだそうですが、正式に学校に通ったという話は聞いておりません。ただ、明治18年の秋に東京に行って祖父の屋敷に二年近く滞在していたそうですから、その間に東京専門学校（\*早稲田大学の前身）の人を家庭教師にして様々な学問を学んだらしいということは聞いたことがあります。ちなみに、父の弟たちは学習院に通ったそうです。父は、宮内省からイギリス留学を勧められたのだそうですが、頑固党（\*王朝復活を目指していた親清派）の反対に遭い、洋行の夢は挫折してしまっただけのことです。

当時は、まだ頑固党の勢力が強く、その勢いは開化党（\*日本への併合を支持する親日派）を圧しておりました。日清戦争の際、頑固党の勢力を恐れる奈良原知事が本土からの寄留民を集め、「福州艦隊が沖縄にやって来ると、沖縄人は支那に味方して我々は大変なことになる」と言って、刀や銃で武装させて山中に避難させたこともあったそうです。

父は博識かつ能書家で、漢詩が得意でしたが、琉歌も作っていました。父は明治26年に『琉球新報』を創刊し、他にも沖縄銀行や沖縄広運を設立して事業家としても活躍しておりました。また、明治29年には男爵に叙されて、年金二千元を支給されています。明治37年には貴族院議員にも選ばれ、大正2年まで二期務めました。

母は沖縄で小学校を終えていましたが、外祖父が東京の勤務を命じられたので、外祖父に付いて妹と一緒に東京に渡ったのだそうです。男尊女卑の風潮が強かった時代に、妹と一緒に東京女学館に通ったそうですから、当時の沖縄では珍しいインテリの女性でした。東京女学館での五年間の学業を終え、外祖父と共に帰郷して家におりましたが、父尚順の母のたつての望みで、父の妻を迎えられました。母21歳、父32歳の時のことでした。

家は大家族なので、使用人が何人いたのか、きちんと数えたことはありませんが、男性が12、3人で、女性もそれ以上いたと思います。男性は会計係を始め、父の秘書、農園の仕事をする園丁、野菜作りをする農夫、それと水道のない頃ですので、台所用の二つの大きな水甕と家族の手洗い用の四つの大きな水甕をいつも満杯状態にしておくための人夫が二人いました。さらに、父は人力車で外出するので、車夫も二人おりました。それに、父が毎日農園を見回りに行く際に、煙草盆やお茶盆を持って子供供する14、5歳の男の子を合わせると、相当の人数になりました。家では、両親は標準語を使わず、先祖伝来の王府の言葉を使っておりました。

女性の使用人は、子どもの数だけの乳母がいましたし、食事の世話をする女中が二人、母の身の回りの世話をする若い女性もいて、やはり結構な数になりました。ですから広い家でしたが、いつも周りには誰か人がいて、狭く感じられたものです。食事の時には廊下に乳母がずらっと控え、それぞれの担当の子供の食事の様子を見守り、台所と食事室の間を擦れ違いながらお代わりを運ぶさまはまことに賑やかでした。

私は幼稚園には通わずに、沖縄師範の付属小学校に入学しました。付属に入る時に簡単な面接試験があって、百まで数えさせられ、また積み木で立体図形を作らされました。付属小学校は主事先生 (\*校長先生) だけがヤマト (\*本土) の人で、先生方は師範学校を出た沖縄の人でした。女の先生は裁縫の先生だけでした。一学年二クラスで、一クラス 40 人でした。ヤマトの子供は二人だけでした。男女は同じ組で、一つの机に男女が並んで座っておりました。

学校に入って初めて標準語を習った訳ですが、最初は先生の話す言葉が解らないので、学校に行くのが怖かったことを覚えています。私の時は、「ハナ」、「ハト」、「マメ」と単語から習いましたが、妹の時は、「サイタ、サイタ、サクラガサイタ」と文章から習っています。単語は、方言でも似ているのが多いので、直ぐ解りましたが、文章は、例えば「キョウ、ナニヲタベマシタカ」が「チュー、ヌーカダガ」のようになるので、最初は外国語のようで、さっぱり判りませんでした。

それでも、一年の二学期頃からは聞いて解るようになり、二年頃からは文章でも話せるようになりました。また、三年頃からは方言を使うと友達に木製の方言札を渡されるようになりました。ただ、方言札を渡されても、別に先生に怒られることはありませんでした。五年になると、女の子は裁縫や編物を習うようになり、男の子は手工を習っておりました。

当時、女の子の着物は自由でしたが、スカートをはいておりました。場合によっては、沖縄やヤマトの着物を着て袴をはいていました。田舎の学校の子は裸足が普通でしたが、付属の子は皆靴下と靴を履いておりました。入学した時は、ビロード製の肩掛けカバンでしたが、四年からはランドセルでした。五年からは、進学希望者を対象に補習授業が始まりました。ただ、算術だけは主任の先生が教えてくれました。

付属を卒業して、沖縄県立第一高等女学校に入学しました。付属の同級生のうち、12~3 名が女学校に進んだものと思います。第一高女は、300 人以上が志願して、150 人が合格しました。先生方は、ヤマト人が多かったのですが、沖縄人の先生もおりました。

一学年三クラスで、甲、乙、丙の三クラスでした。甲は高等科から来たクラスで、私は丙で早生まれのクラスでした。ヤマト人の娘は、一クラスに五人ほどおりましたが、皆沖縄で育った人たちですから方言も習慣も解るので、何もトラブルはなく皆仲良く過ごしておりました。

学校では、もう方言を使うということはなく、皆標準語で話しておりました。制服は、セーラー服にスカートで、夏服と冬服がありました。靴は革靴で、カバンは手提げカバンでした。時計は、皆裕福な家の娘なので、たいていの人が持っておりました。裁縫の時間が週四時間と多く、和裁と洋裁と編物を習いました。また、英語の授業もあって、外国人の先生ではなかったのですが、英語だけで教えてくれました。修身の

試験では、「教育勅語」を書かされました。授業は教室を移動して行われていましたから廊下で先生に会うと会釈していましたが、先輩にはしませんでした。また、一年に一回神社参拝があって波の上宮に御参りしていました。

私のクラスは、早生まれで幼かったせいか、三年頃になると、よく先生に悪戯を仕掛けては喜んでおりました。ドアの上に黒板消しを挟んでおいたり、後ろから脚をつねったり髪を引っ張ったりなどして英語の先生をからかっておりました。そういう悪戯をするのはたいてい那覇の人で、首里の人は見ているだけでした。

クラブ活動もあって、バスケットボールをしておりました。第一高女には、講堂はありましたが、プールはありませんでした。四年の時に二週間の本土への修学旅行がありましたが、私は参加しませんでした。私が初めて本土の土を踏んだのは、昭和33年でしたが、パスポートを持ち、ドルを円に交換して行ったのです。

第一高女を卒業したら、電話交換手の仕事をしたいと思っておりましたが、夜勤があるので那覇に住んでいる人でないと駄目と言われました。それで、県庁前に住んでいた兄に頼んでみたのですが、反対されて結局交換手の仕事は諦めました。女学校を卒業すれば直ぐ小学校の先生になれた時代でしたが、自分は先生には向いてないと思い、第一高女の家政科(\*二年制)に進むことにしました。本当は、家にいると農園の草取りばかりさせられるので、それが嫌で家政科に入ったのです。

家政科には、17~8人ぐらいが入りました。先生方や服装は本科と同じで、公民と修身、裁縫や料理、それとタイプなどの実用的なことを教えるところでした。料理は沖縄の先生でしたが、沖縄と本土の両方の料理を教えてくださいました。毎日、生徒三人が当番で本科の先生方の昼食を作っておりました。

家政科を卒業して、二年ほど家で家事手伝いをしていましたが、昭和12年の11月に20歳で結婚して台湾に渡りました。主人は七歳上の首里の土族の出で、県立一中を出てから台北の高等商業を卒業して、総督府の税務課に勤めておりました。結婚の二年前に親同士が合意して婚約していたのですが、その時は写真で見ただけでした。その後、昭和10年に台北で博覧会があったので、その際に初めて顔を合わせました。博覧会は、主人の母と妹二人との計五人で見学しました。その時は、博覧会の印象について語り合っただけでした。何でも、主人は不満だったらしいのですが、主人のお母さんの意見で決まったのだそうです。

最初は、沖縄で式を挙げることにしましたが、高雄にいる主人は、いつ召集があるのか判らないので来られませんでした。それで沖縄にいる主人の両親だけが来て、新婦だけの結婚式を挙げました。その後、台湾に渡り、高雄から台北に来ていた主人と写真だけを撮りました。主人は、台北の高等商業を出たエリートでしたから、本土の人間から馬鹿にされたという話は聞いたことはありません。

当時の主人の給料は、60円を少し超えていたと思いますが、他に出張旅費が毎月

10～15円出ましたので、生活は結構楽でした。家は官舎で、六畳、四畳半、三畳と台所とトイレと風呂が付いていました。食事は自分で作りましたが、掃除や洗濯は台湾人の女中さんをお願いしていました。日用品は、台湾人の行商がリヤカーを引いて毎日来ていましたので、それで済ませておりました。生鮮食品は、市場が近くにありましたので、そこを利用していました。

家では、普段ワンピースを着ていましたが、外出する時は着物を着て出掛けておりました。高雄にいた時には、授産所に通って洋裁を習っていました。ちなみに台湾人は、台北でも台湾服を着ておりました。台湾人は、内地の人間とは風俗も習慣も違っていました。それでも同じ日本の国民だと思っていました。

官舎は、ほとんどが内地人でしたが、沖縄の人は他におりませんでした。台湾人との付き合いは、女中さんと行商の人に限られていて、台湾人の友人はいませんでした。私の隣は静岡の人でしたが、私が尚家の娘であることは明かさずに付き合いおりました。ただ、台湾生まれの、いわゆる「湾生」の奥さんたちが多かったせいか、別にトラブルなく付き合いおりました。

それでも、一度だけトラブルらしいことがあったのですが、それは近所の女学校の女の先生とのことでした。何でも、地方から来ている教え子を一人置いてくれないかという依頼でした。その先生は他の人にもお願いして、何人かは置いてもらいたらしいのですが、私のところは子供が二人いてまだ小さかったものですから、丁重にお断りしました。すると、その先生は気分を害したらしく、出し抜けに「あなた沖縄でしょ。沖縄ってどこにあるのかしら」と嫌味を言ってきたのです。私はむっとしましたが、努めて落ち着いた声で「先生、地図をご覧ください。小さい島ですが、ちゃんと載っていますよ」と言い返しました。すると、その先生は、それきり黙って帰って行きました。

主人は、昭和13年の8月に召集され、台南の陸軍の連隊に補充兵として入隊しました。最初は、海南島に行き、最後は広東で除隊して昭和15年に上等兵で帰って来ました。主人が出征して、子供が出来るまでの一年間は、高雄の姉の所に寄宿していました。台湾にいた時は、主人が昭和15年に除隊して息子が二つの時、10日ほど沖縄に戻っただけで、後は終戦後まで帰れませんでした。

台湾での生活は、初めの頃は至極平和で、同じ官舎に住んでいる近所の奥様方と楽しく交流しておりました。ただ、大東亜戦争が始まってからは物資が乏しくなり、米が配給制になりました。代わりにバナナが每日一房ずつ配られましたが、子供たちは食べ付けていないので、よく下痢をしておりました。肉の配給は全然なく、仕方なく近くの農家へ行って卵や野菜を買って来て子供たちに食べさせていました。

戦局が悪化するにつれて、台北にも敵機が来襲するようになりました。隣近所は皆出征軍人の家族で、男の人はおりませんでした。官舎の門の前の通りに防空壕を掘る

のが仕事になり、一週間でやっと親子三人が入れる壕が出来ました。壕が出来ても安心することは出来ず、毎日警報器の音に怯えながら壕に入ったり出たりする毎日でした。

空襲が激しくなり、爆弾が落とされるようになりましてので、疎開することに決め、衣類だけ持って主人の伯母のいる台北の北方の草山（\*現在の陽明山）へ行きました。屋敷内の雑木の生えた場所を開墾して畑にし、大根、野菜、芋などを作り、自給自足で暮らしておりました。また、時には台北に出掛けて、卸の店から洗濯石鹼を仕入れて来て、別荘の奥さん方や集団疎開している人たちの所に行って売り歩いておりました。稼いだお金で子供たちにおやつを買って与えていました。草山には、時々魚売りが来ましたので、台北の官舎にいた時よりは良い食事を摂ることが出来ました。

昭和20年になると、上の息子は学齢期に入っておりました。近くに小学校がなかったため、近くの学齢期の子供たちを集めた寺子屋式の学校を造り、先生を一人頼んで教えてもらっていました。草山は田舎でしたが、別荘地でしたので、台湾人でも裸足は見られませんでした。終戦後、私の周りでは、台湾人に報復されたり、嫌がらせをされたりすることは別になく、平穏に引き揚げの日を待っておりました。

主人は昭和17年に再度召集され、南支那の桂林方面に進駐していました。幸いにも、怪我もせず広東で終戦を迎えました。主人は軍人でしたので、一足先に横須賀に引き揚げていましたが、私は昭和21年の春に沖縄に引き揚げました。沖縄に着いて見ると、戦禍で昔の面影はなく、両親は沖縄戦の最中に亡くなっておりました。

今振り返ってみますと、沖縄よりも台湾の方が食べ物や物資も豊富で、ずっと豊かな生活を享受できたような気がします。戦争さえなかったら、おそらくずっと台湾に住み続けていたのではないかと思います。

### (31) 屏東の街で

林淵霖（1923年生）早稲田高等工学校電気科卒

父は、明治28年生まれの澎湖島出身の福佬人です。大正の初期に、南部の屏東の目抜き通り（\*現在の逢甲路）に「林慶雲時計店」という店を構えて、時計の販売と修理を始めました。大正から昭和へと時代は移り、時計だけでなく楽器やレコードなども扱うようになって、銀座の服部時計店や浜松の日本楽器などとも取引をしておりました。父は、公学校には通いませんでした。が、書房に通ったのか、漢文が書けて、漢文で手紙を書いておりました。また、内地人と付き合っていましたので、片言の日本語を話しておりました。母は、当時の台湾人の女性の常として字は全然書けませんでした。

5歳の時、父の計らいで幼稚園に入りました。長老教会の幼稚園だったので、先生

も台湾語で物語を話して聞かせたり、みんなで歌を歌ったりの楽しい毎日でした。ある日、先生から「あなたたちは、公学校に入ると、日本語で名前を呼ばれるので、今日から日本語式に名前を呼びますね」と言われました。それ以来、日本語の漢字音で名前を呼ばれるようになりましたが、幸い私の名前の台湾語の漢字音は、日本語の漢字音に似ていたもので、全然違和感はありませんでした。

屏東公学校は、一学年二クラスで百人ぐらいでした。屏東公学校は、男子だけの学校でした。女子は、屏東女子公学校に通っておりました。当時の台湾では、男女は同席させなかったのです。

校長や教頭は内地人でした。担任の先生は内地人が多く、台湾人の先生は少なかったのです。台湾人の先生は、師範を卒業した先生と独学で資格を取った先生とがおりました。両者間には、昇進や給料の面で差がありました。師範学校出身者は判任官で官服を着られましたが、検定組は官服を着られませんでした。当時は子供でしたので、その差はあまり認識しておりませんでした。

先生の中にも、子供のことを本当に良く考えてくれる先生と叩くばかりの先生がいました。一年の時は台湾人の先生でしたが、二年からは内地人の先生でした。公学校では、漢文は習わず、一年から日本語を習いました。台湾人の先生だけでなく内地人の先生も、成績の悪い子は鞭で手の平を叩いておりました。盗みなどをした時は、罰としてビンタを張っておりました。

公学校へは、裸足で通っていました。靴を履くと、足が蒸れて臭くなるので、裸足の方が健康的なのです。普段は、運動靴を手に提げて行って、学校の中だけで履いていました。当時、靴は一足20銭ぐらいしておりました。

私の弟は、脚が不自由だったので、体育の授業に付いて行けないという理由で公学校への入学を断られました。それで、直接小山校長先生にお願いして、公学校に入れてもらおうとしたのですが、内地人の気性を良く知る人の忠告で、校長先生の家に贈り物を届けに行くことになりました。

校長先生に、「父に『これを届けて来い』と言われました」と伝えて渡そうとしたら、「こんなものは受け取れないから持って帰れ」と断られました。「お歳暮の時も、こんなことしたらいけないんだと言っただろう」と駄目を押されました。なぜ受け取ってもらえないのかと困りましたが、私も「家には持って帰れません」と粘りましたら、最後には、「困ったなあ、よし、分ったから帰れ」と、ようやく受け取ってもらえました。ただ、入学できるかどうかは全くの未知数で、入学審査までは不安で一杯でした。

三月末に入学審査があり、父と弟と三人で学校の面会室で、順番待ちしている間も不安で落ち着きませんでした。やがて弟の名前が呼ばれて、三人で審査室に入ってきました。校長は、「去年の審査で入学できないと話したはずだ。この子が贈り物を

持って来たが、入学は出来ない」と冷たく突き放したのです。父は、ただ「どうか入学をお願いします」と繰り返すだけでした。

校長は、かなり厳しい表情でしたが、不意に「君の受け持ちの先生は誰か」と聞いてきたのです。私は、「はい、受け持ちは西郷先生です。国語の授業が大変面白くて、学校へ来るのが楽しいです。西郷先生は、何時も『君たちは皆日本人だ。国語を勉強して、将来は立派な日本人となって国のために尽くせ』と教えてくれています。弟も立派な日本人になるためには、学校で毎日勉強しなければなりません」と、「話し方」の授業のつもりで一気に話したのです。

校長は、こちらを凝視していましたが、やがて眼鏡を外してハンカチで目の辺りを拭き、「君たちはもう帰ってよい。入学式は四月一日だから、君は弟と一緒に登校すればよい」と入学を許可してくれたのです。一年間、ずっと悩んでいた「入学」がやっと許可された時、父は、「一年遅れた入学だが、しっかり勉強すればいいんだ」と、珍しく笑いながら話しておりました。

4年生から6年生までの3年間、夏休みの間だけ書房に通わされました。書房のことを別に漢学とか漢塾とも言っておりました。近所の廟の中の、警察でも分からない部屋を使って、朝8時から11時半まで授業がありました。書房での漢文の授業は公式なものではなく、警察からは半ば禁止されており、漢文など習わずに早く国語を覚えて皇民になれと脅かされていたのです。

書房の先生は、日本語が出来ませんでした。公学校にも通っていなかったのでしょう。先生は独身で、あちこちへ行って教えておりました。先生は、30代の澎湖諸島の出身者でした。父の知り合いなので、その縁で屏東に来たとのことでした。格好は、ハイカラ頭に普通の洋服で、一般の人と変わりませんでした。ただ、漢詩が好きで、普段は詩を吟じたりしておりました。

生徒は8人ぐらいで、女子はいませんでした。書房には個人個人の机や椅子はなく、大きなテーブルを囲んで丸椅子に座って勉強しておりました。先生は、別の小さな机で、生徒が書いたものを持って行くと、赤い墨の付いた筆で直してくれました。先生は、教える時は生徒の周りを回りながら教えていました。もし警察が来たら困るからと、黒板はありませんでした。

子供たちは8歳から14歳ぐらいで、年齢によって理解度が違っていましたから、習う本が違っていたのです。そのため、子供は順番に一对一で先生の机の前に座り、先生は例文を二、三度台湾語で朗読して聞かせ、それを子供は暗唱するという方式で、個人指導をしておりました。意味は後回しでした。また、子供の字の書き方がおかしい時には、子供の書いた字を赤い筆で、ここをこういう風に力を入れるとか言って直していたのです。

最初は、『三字経』を一ヶ月ほどで終えて、次に手紙の書き方を習いました。漢文

で、尊敬語も習いました。唐韻で習いましたが、唐韻は日本語に近いのです。次に、『大学』や『中庸』に進みましたが、全部はやりませんでした。20語ぐらいの文章を暗記させ、翌日また、それを繰り返させるのです。出来が悪いと、土間に正座させて、小さい棒で手を叩くのです。ただし、頭や顔は叩きませんでした。

五年と六年の夏休みには、近くの個人の家の2階の一室にある書房に通いました。先生は、40代で家族がおりました。生徒は、二、三人でした。授業は午後で、休み時間とか休憩はありませんでした。まず、『大学』を習い、次に『中庸』へと進みました。指導方法は廟の書房でも個人の家の書房でも大体同じでした。

まず、先生がテキストを見ずに例文の模範音読を何度か繰り返し、次に子供たちが暗唱して、正しい発音を覚えさせられました。書き方も習いましたが、やはり意味は後回しでした。正しく暗唱できた者から家に帰っても良いと言われていました。学校とは違って、早く覚えれば早く帰れたのです。翌日、もう一回習ったところを暗唱し、出来ているのを確認してから次に進んでおりました。家に帰ると、何を覚えてきたかを親に報告していました。書房では、学校と違って試験はありませんでした。

書房に来る子供は、勉学意欲があり、概して優秀でした。友達も何人が通っていましたが、私のクラスの中では一人か二人しかいませんでした。客家の人は家の手伝いが忙しく、書房には通っておりませんでした。私の通った書房には、飯1杯が2銭で食べられた時代に、1ヶ月に1円近くの月謝を納めていたように記憶しております。

五年生の頃、国語演習会に参加したことがありました。三分前に与えられた題は「報恩」でした。制限時間は五分以内でしたが、四分半ぐらいで話し終えて席に戻りました。演習会が終わって、山下先生に呼ばれましたが、「簡潔に要点を纏んでいて、話し方もはっきりしており、大変良かった。今後も努力を続けるように」と励まされました。

五年生から六年生に上がる頃、上級学校へ進学する生徒は「受験勉強」をすることになり、担任の安田先生から週三回、宿舎で夜六時半から八時半まで補習授業を受けることになりました。六畳間に七人の生徒が各自手製の小型の机を持ち込んで勉強をします。初めて先生の宿舎の玄関に集まると、奥様が出て来て、「皆さん、裏口から風呂場に入り、そこで足を洗って布巾で足を拭いてから上がりなさい」教えてくれました。内地式に畳の上に膝を曲げて座るのは新しい体験でしたが、座り慣れていない子供たちのために、先生は時々「膝を伸ばせ」と三分間休憩させてくれました。一週間ぐらいすると慣れてきて、受験勉強以外にも内地の生活の一部を認識できたのは大変有り難いことでした。

公学校を卒業して高等科に入りましたが、入学試験はありませんでした。一学年20名ぐらいが在籍していましたが、女子はありませんでした。先生は、尋常科の先生が兼任していました。高等科では、高等科用の教科書を使って、国語や代数・幾何、

地理、歴史、生物、体育、唱歌、図工、農業などを学びましたが、英語はほんの初歩だけでした。

高等科の時には、少年団に入って活動していたので、書房には通いませんでした。少年団は5人だけだったのですが、先生が指導者として親身になって色々なことを教えてくれました。同じテントで同じ釜の飯を食べる内に、自然と内地人の生活や習慣というものを覚えていきました。

少年団を卒業すると、青年団というのがありました。これは台湾人だけでしたが、国防婦人会は内地人だけの団体でした。シンガポール陥落の時などは、台湾人も内地人と一緒になって提灯行列に参加しておりました。ただ、支那事変の時、老人たちが集まって「なぜ、また支那と戦争するのか？」と嘆いていたことが、今でも忘れられません。

高等科を卒業しましたが、台湾の中学は、台湾人には入学が難しいので、内地の中学に留学することに決めました。私が東京へ勉強に行くと言った時、校長先生は大変だから台湾で勉強しろと言ってくれました。昭和13年の10月末の、夜行列車で屏東を発つ夜、校長先生と担任の先生がわざわざ駅まで見送ってくれ、「これから内地は寒くなるから気を付けなさい。君が成功して故郷に帰ってくる日を待っているぞ」と励ましてくれたのです。

内地に行く時、父が銀行で台湾銀行券を内地の銀行券に替えて渡してくれました。その時、百円札が一枚混じっておりましたが、私には初めての百円札でした。台湾から東京までの通し切符は35円でした。巡査の一ヶ月の本給分でした。ただ、渡航証明書などは必要なく、渡船の際の警察による取り調べもありませんでした。

校長先生とは、昭和21年に、私が日本から帰って三日後、郵便局の前で偶然出会いました。「先生、これからどうするんですか」と尋ねたら、「君、無事帰国できて良かったな。どうなるか判らないが、台湾にはいられないんだよ、空襲で家もなくなっているし。これから帰国準備だが、長野の故郷もどうなっているのか全く判らない。民族の大移動だよ。君もこれからは台湾のために頑張るんだな」と答えたのですが、これが校長との永久の別れになってしまいました。内地人の先生は、日本語を教えてくださいましたが、同時に人の道も教えてくれたのです。

屏東には台湾製糖の本社があり、また軍隊も駐屯していましたから、内地人が多数住んでおりました。市内には福佬人が住んでいて、客家人はいませんでした。郊外には客家人の村が広がっていました。

台湾製糖には、福建省南部出身の福佬人とは言葉の通じない、福建省北部出身の福州人のクーリー(苦力)が沢山来ておりました。また、床屋、洋服屋、料理屋にも福州人が多く、向かいの福興楼も福州人の料理屋でした。父の店にも時計の修理技術を習得した二人の福州人が勤めておりました。二人とも真面目な人柄でしたが、福州人

の友達が遊びに来ると、徐々に声が大きくなり、時には喧嘩をしていると誤解されるほど大声でしゃべっておりました。福州人以外にも広州や上海から来た支那人たちもおり、華僑会館を建てて寄り集まっておりました。

華僑の子弟は、公学校には入れましたが、中等学校には外国人ということで進学できませんでした。それで、身元を明らかにしなくても受験できる検定試験を受けて進学しておりました。

屏東では、他の台湾の街とは違って内地人と台湾人とは混ざって住んでいました。実際、私の隣家は内地人の床屋と漬物屋でした。それで、私は内地人の奥さんと母との通訳をしておりました。母は、内地人の奥さんから生活の智慧を色々教えてもらっておりました。母は内地人に好感を持っていましたが、父も内地人が訪ねて来ると、喜んで料理を振舞っておりました。私は、御馳走の御裾分けに与るのが楽しみでした。

内地人の奥さんの影響を受けて、母も服が汚れないようにと割烹着を着て料理を作っておりました。昼は裸足で働くのですが、夜足を洗った後は、足が汚れないようにと下駄を履くようになりました。また、内地人の奥さんから漬物の漬け方を習い、自分で作って食卓にも載せておりました。

隣の漬物屋は、桶に白菜を入れて塩を撒き、それを足で踏ん付けておりました。台湾人から見ると、「汚いなあ」と思ったのですが、足は良く洗ってあるので別に問題はなかったようです。

また、道で内地人の奥さん同士が会おうと、何度も頭を下げて「先日は本当にお世話になりました」、「いいえ、こちらこそお世話になりました」と、延々と挨拶を繰り返すのです。その様子を、周りの台湾人が「どれぐらい続くのかな」と興味津々眺めているという光景が繰り返されていたのです。

近所の桶屋のおばさんが、「今夜、映画見に行くのよ」と言って、内地人向けの畳敷きの映画館に行くのですが、皆浴衣姿で座布団に座って映画を見ておりました。私は、その中に紛れ込んで、よく内地人と一緒に映画を見ていたのです。

また、近所の内地人の床屋や自転車屋には、内地人だけではなく台湾人も客として出入りしておりました。そのような環境ですから、公学校へ入る前からある程度日本語は知っていました。内地人の生活とか習慣も知ることが出来ました。

内地人は、風呂好きで綺麗好きだと思っておりました。内地人は、風呂上りに浴衣一枚に下駄履きで通りを散策することがありましたが、別に問題にする人はいませんでした。台湾人の女性も低い下駄を履くようになっていたのです。

当時の屏東では、台湾人と内地人は平和的・友好的に共存していた感じで、台湾人と内地人が喧嘩している姿など見たことはありませんでした。喧嘩の元になるようなものがなかったのです。

タンキー（童乩）という男のシャーマンがいましたが、このシャーマンがトランス

状態になって、訳の判らぬ字を書いたり青龍刀を振り回したりして、自分の背中を切り付けて鮮血を流しておりました。タンキーの書いた文字は、道士が判読して占いをしていたのです。他に盲人の男の占い師もおりました。

両親は、仏教信者でしたので、そのような占いは迷信として一切信じず、屏東にあった仏教寺院の「東山寺」によく寄付をしておりました。東山寺には、内地人の東海宜誠師が住職を務めていましたが、終戦まで35年間も台湾語で布教を続けていたと父が話しておりました。

そのような環境で育っていましたから、内地へ行っても別に違和感を受けませんでした。ただ、銭湯に行ったら、皆真っ裸になって入浴していたので、びっくり仰天しました。台湾では、同性でも裸を見せ合うことはなかったもので、大きなカルチャーショックだったのです。

また、下宿の部屋探しをしたのですが、同じ広さでも南向きと北向きとでは家賃が違うのにも驚きました。台湾では、日当たりは全然気にしないのです。部屋探しの際には、朝鮮人とは違って差別されたことはありません。むしろ、台湾人と言うと歓迎されたので、最初から台湾人と断っておりました。

東京では、研数学館に通って受験勉強に励み、電機学校に進学することにしました。研数学館には朝鮮人の学生が多数通っていましたが、性格が荒く、自分の物と他人の物との区別の付かない者が多かったので、付き合いませんでした。ある時など、朝鮮人が食堂の箸や匙を黙って持って行こうとしたので、私の友人がたしなめたところ、食堂の主人から「良く注意してくれた」と褒められていました。

また、私が最初下宿した中野の下宿屋の主人の言葉がおかしかったので、手伝いの女の人に聞いたところ、奥さんは朝鮮人とは知らずに結婚して、後でそれが判って騙されたと言っていたそうです。

電機学校を卒業して、早稲田の高等工学校の夜学の電気科に入りましたが、昼は電気研究所で働いておりました。台湾では、内地人との間に差別があると感じていましたが、内地に行ってみたら、差別が全然ないのに驚きました。

ただ、幹部候補生として軍隊に入ろうと思って申し込んだのですが、「お前は、台湾人だから駄目だ」と言われました。内地に住んでいて、給料も内地人の同僚と全く同じで差別がなかったので、自分は内地人と同じだと思っていたのです。「駄目だ」と断られた時は、志望していた学校の入学試験に落ちたような気分でした。

また、海軍の研究所で働こうとした時、やはり「お前は台湾人で軍籍がないから駄目だ」と言われましたが、初めて「自分は差別されているんだなあ」と感じました。

ある時、台湾人の友人たちと渋谷を散策していて交番の前を通り掛かった時、突然警官に「何だ、その格好は！ちょっと中に入れ！」と言われ、友人が引っ張り込まれました。私は入らずに突っ立っていたのですが、すると「お前もさっさと入れ！」と

一発ピンタを張られました。友人は、三字名の名刺を沢山持っていたので、怪しいと疑われたのですが、「自分の親戚だ」と釈明したら、結局「もういいから帰れ！」と釈放されたことがありました。

当時、自分は内地人とは違うという台湾人意識はありましたが、それでも日本人には違いないと思っておりました。ですから、日本からの独立や支那への復帰などは考えたこともありませんでした。当時は、「本島人」と「内地人」という言い方をしていました。それは、「台湾人」には何となく軽蔑したニュアンスがあったからです。

私は改姓名をしませんでしたが、内地では「林(はやし)」と呼ばれておりました。早稲田の電気科に通っていた頃、父は毎月30円を電報為替で送ってくれました。その金を郵便局で受け取り、カバンに入れて下宿に持って帰っていましたが、スリや盗難に遭ったことは一度もありません。

東京では、台湾人が集まって不平・不満を洩らしていたので、私はそのような台湾人と付き合うと日本語の勉強にならないと思い、台湾人とはほとんど付き合いませんでした。

電気科を卒業後、逓信省に就職して、北多摩郡の田無町の電気試験所分室で研究に没頭しておりました。軍需工場が集まっていた田無町は、戦争末期、B29の爆撃目標になりました。来る日も来る日も空襲から逃げ回り、8月15日に職場のスピーカーからの玉音放送を聴きました。終戦の報に接してからは、「今度は中国人になるのか。北京語を勉強しなければならないのか」と不安になりました。

台湾への引き揚げ船を待つ間、「もう日本人でなくなったのだから、一日でも早く新しい国語を覚えよう」と思い、中華民国の大使館が東京の両国で始めた語学塾に毎日通って北京語を習っていたのです。

東京を離れる時、使っていた家財は、世話になった下宿のおばさんに譲ってきました。おばさんは「林さんのように健康な人の使っていた物は縁起が良いから、大事に使わせてもらうわ」と喜んでおりました。

日本での思い出は、山歩きのことばかりです。週末ごとに掛けた奥多摩、秩父、丹沢、南アルプス縦走などは、今でも本当に楽しい思い出です。内地での戦争体験は、人生にマイナスになったとは思いません。かえって、逆境を撥ね返す強い意志が備わったと思っています。

日本時代は苦しいこともありましたが、概ね幸せな時代だったと言えるでしょう。中には、巡査のように直ぐ台湾人を殴るような人もおりましたが、大多数は善良な人たちでした。先生方は、奥さんも含めて家族で付き合ってくれました。

1936年のベルリンオリンピックの時には、夜更けに隣近所の人たちが私の家のラジオの前に集まって、水泳の前畑選手やマラソンの孫選手の活躍を熱狂的に応援しておりました。あの当時は、台湾人も内地人も朝鮮人もなかったのです。

### (32) 頭目の末裔

林昭光(民族名;ポート・タンカリ)(1925年生)宜蘭農林;桃園農業卒

私の祖父のワタン・セツはタイヤル族で、代々新竹州の角板山一帯の総頭目を務めてきました。日清戦争で台湾が日本領になった後でも、祖父は戦わずして日本の軍門に下るのを潔しとせずに抵抗の道を選んで、1903年に開戦の火蓋を切りました。善戦しましたが日本軍の物量に抗しきれず、結局1908年に和平を選択することになりました。その条件として、祖父は子供たちを日本人の学校に入学させてくれるようにと申し出ました。結局、条件は受け入れられ、祖父は日本と和解したのです。

祖父の長男は、刺青をしていたので学校には通えませんでした。祖父の次男で私の伯父の林瑞昌(\*1899年生;民族名は「ロシン・ワタン」)は刺青をしておりませんでした。伯父は、1908年に角板山の蕃童教育所に入所し、渡井三郎という日本名を名乗っておりました。教育所に二年間通った後、1910年に約束通り日本人の学校である桃園小学校の三年に転入させてもらいました。

伯父は、尋常科を卒業した後、高等科に進みました。高等科でも成績優秀だったので、修了後は1916年に台北の医学専門学校に進学し、1921年に卒業して先住民で最初の医者になりました。卒業後半年間は、学校に残って医学研究に従事していましたが、10月に故郷に戻り、公医として角板山一帯の山地医療に従事することになりました。

一方では、先住民の生活の近代化にも尽力しました。伯父は、1929年に内地人の日野家の娘と結婚して日野三郎と名乗ることになりました。1940年には、先住民の代表として紀元2600年の記念式典に参列し、1945年4月には、総督府の評議会員にも任命されたタイヤル族の先覚者でした。

終戦後、国民党の時代になってからは、1951年に第一回の台湾省議員に当選しました。伯父は先住民の代表として、山地医療に従事する傍ら、山地行政の一元化、先住民の人材育成、山地農村の復興などを唱えて先住民の権益向上のために奔走しました。しかし、不運にも1952年に共産党のスパイという濡れ衣を着せられ、1954年に他の先住民の指導者たちとともに銃殺されてしまいました。

伯父は非命に斃れたとは言え、日本の高等教育を受けておりました。しかし、私の父の場合、学齢期になる頃に祖父が亡くなってしまい、父の叔父たちに、これ以上子供たちに日本の教育を受けさせると、タイヤル族の魂が失われてしまうという理由で反対され、小学校はおるか蕃童教育所にも通わせてもらえませんでした。

父は、タイヤル族の伝統に従って額と顎に刺青を入れさせられ、上の犬歯も抜歯されてしまいました。それでも、頭目の息子ということで警丁に採用され、日本語を習って流暢に話せるようになっておりました。母も額と頬に刺青を入れていて、教育所に

は通えなかったもので、日本語は片言だけでした。ただ、母の妹は刺青を入れず、教育所には通ったそうです。

私は、伯父と同様に最初は小学校ではなく、角板山の蕃童教育所に入所しました。角板山の教育所は全島で最も大きい教育所で、全部で300名以上が在籍しておりました。校舎は木造の平屋でしたが、教室が二十以上ありました。校庭も広がったのですが、講堂はありませんでした。儀式の時は二つの教室の仕切りを取り払って講堂として使っていました。

先生方は身分上全員警察官で、三名ぐらいおりましたが、他にタイヤル族の助教が5~6名おりました。時には、先生方の奥さんも教えていました。遠い所の子供は、一・二年までは分校で学ぶのですが、三年からは角板山の本校で学ぶことになっていたのです。教育所は四年制ですが、さらに補習科が二年あって、私の頃にはほとんどの子供が補習科まで六年間通っておりました。

教科書は、教育所用のものを使っていました。授業料はなく、教科書やノート、鉛筆や消しゴムにいたるまで全て無料で支給されておりました。さらに、警官が学齢期の子供のいる家を回って教育所に行くようにと勧誘していましたから、ほとんどの子供が教育所に通っておりました。そのため、平地の漢族の子供よりも山地の先住民の子供の方が就学率や識字率が高かったのです。

当時の服装は、男女とも浴衣みたいな着物を着て、帽子や靴はなく裸足で、蔦で編んだ袋に教科書を入れて通っておりました。ただ、他の所に行く場合には、制服・帽子・靴などを学校で貸してくれました。

当時のタイヤル族の家は、壁や屋根が竹で出来ていましたが、私の家は頭目の家系として経済的に余裕があったので、自力で日本式の家を建てました。家には畳の部屋だけではなく風呂もあり、台所も備えてありました。水は、山から清水を竹のパイプで引いてきて使い、灯りは石油ランプを使っていました。私の家は、海拔450メートルぐらいの高地にありましたから、冬は結構寒くて田の水が凍りました。それで暖房が必要でしたが、薪や炭を用いて火鉢で暖を取っておりました。

父は警丁ですから、官服を着ていましたが、母は普段和服を着ておりました。ただ、野良仕事の時は和服では無理ですので、仕事着で働いていました。

角板山一帯は、日本領になる前は焼畑だけだったのですが、領台後は警察官に指導されて水田を造るようになりました。元々タイヤル族は泥水に入るのを嫌い、堆肥の作り方も知らなかったのですが、実際に指導された通りに水田で米を栽培してみると、焼畑の何倍も多く収穫できました。それ以来、水田を開いて水稻耕作を始めるようになったのです。

他にも、サツマイモ、サトイモ、ヤマイモ、アワ、トウモロコシなどを栽培し、山では猪や鹿を狩り、川では魚を捕っていましたから、食べる物には全然不自由しませ

んでした。私の家では、水田を三甲歩（\* 町歩）所有して蓬莱米を栽培し、水牛で耕作しておりました。また、養蚕、苧麻、油桐、蓮草（\*カミヤツデとも言い、良質な紙の材料になる）などで現金収入を得ていました。

当時、先住民には税金は課されておりませんでしたから、角板山の先住民の生活は、地主ではない農村の漢族よりも豊かだったのではないかと思います。特に、角板山は、私の伯父のような先覚者がいたこともあって、全島の先住民の部落の中でも最も早く開け、模範部落として他の先住民の人たちが多数参観に訪れておりました。

私は、教育所で二年まで勉強しましたが、三年に上がる際に、民族名の「ポート・タンカリ（\*タンカリは父の名）」から日本名の「日野昭夫」に改名して、内地人の学校である大溪小学校に転入しました。大溪小学校は、主に山地に勤務する警察官の子弟の学ぶ小学校で、一学年一クラス 20 人の小さな学校でした。全校で、タイヤル族の生徒は女子の一名を含めて 6 名おりましたが、全員警丁の子弟でした。教育所は、授業料は不要でしたが、小学校では授業料（\*学級費のことか？）を納めていました。もちろん家からは通えませんから、全員学校の寄宿舎に内地人の子供と一緒に入って勉強しておりました。

タイヤル族の子弟が教育所から小学校に転入する場合は、一学年落とされるのが普通だったのですが、私の場合は落とされずに、そのまま三年に転入させてもらいました。ただ、教育所ではカタカナしか習っていませんでしたから、ひらがなが解らず、また日本語も上手く話せず、三年の時は成績が振るいませんでした。それでも四年になると、普通に話せるようになって成績も向上してきました。

先生方は皆内地人で厳しかったのですが、内地人の子供とは仲良く過ごしていて、苛められたり喧嘩したりすることはありませんでした。ただ、タイヤル族の上級生にはよく苛められて、辛い思いをしました。

大溪小学校を卒業して宜蘭農林学校（\*五年制）を受験し、無事合格しました。先生方は大変厳しく、農業実習を何度もやらされました。同級生では、タイヤル族は私一人だけでしたが、上級生にアミ族の生徒が一人おりました。寮に入って、内地人や台湾人と一緒に生活しましたが、私は台湾人よりは内地人と馬が合って仲良くしていました。

私は剣道を選択しましたが、熱心に稽古した甲斐があって初段を取りました。また、喧嘩が強かったので同級生から苛められることはありませんでした。ただ、上級生には何度か挨拶をしないとイチャモンを付けられて、ピンタを張られました。

五年に上がる際、故郷の近くの桃園に農業学校が開校していましたので、宜蘭農林から桃園農業に転校しました。桃園農業では、台湾人の同級生から「蕃人」と罵られたことがありました。頭に来たので「よし、俺のことを蕃人と言うなら、蕃刀を持って来てお前の首を狩ってやる」と脅しました。すると、その級友は私の剣幕に怖気づ

いたのか、二度と「蕃人」とは言わなくなりました。

1943年に桃園農業学校を卒業して、新竹の「山地興業株式会社」に勤めました。給料は50円でしたから、タイヤル族の若者としては高給取りでした。勤めて一年目に「陸軍特別幹部候補生」の募集がありました。それを見て、どうせ軍隊に行くことになるのなら、早く入って技術を習うのが得だと思って、親に相談せず志願することになりました。まだ、タイヤル族には徴兵制がなかったのですが、当時は自分のことを日本人と認めていたので、迷うことなく志願したのです。

筆記試験と身体検査、それと口頭試験がありました。三万名余りの志願者のうち62名が合格したのですが、なんと私もその中に入っていました。天にも昇る気持ちで、両親に伝えたところ、父は大変名誉なことだと喜んでくれ、母は立派な息子を持ったと嬉し涙に暮れておりました。学校の恩師たちも喜んでくれました。部落の人たちは壮行会を開いてくれ、盛大な見送りを受けて福岡の太刀洗航空隊目指して旅立ちました。

太刀洗の航空隊では、差別が全然感じられず、上官も高砂族だからといって馬鹿にするようなことは一切ありませんでした。また、上官に殴られたこともありません。後で上等兵に昇級しましたが、月給は15円だったと思います。同期生の中に朝鮮人が二人いましたが、気性が荒くて喧嘩をすると血を見るまで止めませんでした。

太刀洗では、実地訓練や学科の勉強の他にも軍事訓練があって大変でしたが、食べ物は十分あって、ひもじい思いをしたことはありません。

終戦の報に接した時は、実に残念無念という思いでした。直ぐには台湾に帰らずに、山手線の電車の車掌になりましたが、月給が安いので三ヶ月で辞めてしまいました。日本人の友人と芋菓子の製造を手掛けたりして、ずっと日本に残るつもりでおりました。それでも、自分は長男なので、親の面倒を見る責任があると思い直して台湾に戻ることにしました。

1947年の一月に船で基隆に着き、日本の銀行券を台湾の銀行券に交換してもらおうと思って札を出したのですが、「日本に行って交換して来い」という係員の薄情な言葉に失望してしまいました。さらに、国民党の軍隊のだらしない姿を見て、「これが戦勝国の軍隊か」と落胆してしまいました。いくら戦勝国の国民と言われても癪に障るだけで、台湾に帰ってきたことを後悔しました。

二・二八事件の時は、我々の部落には武器はないし、少数でしたから参加しないことにしました。ですから、二・二八事件で犠牲になった人はいませんが、その後の白色テロの時代に共産党との関連を疑われて、私の伯父のように銃殺された者がおりました。私も関係を疑われて監獄暮らしを余儀なくさせられました。釈放後、角板山の郷長になり、それ以来、ずっと山地行政を担当して今日に至りました。

続